財団法人東方研究会／東方学院

東方だより

第十一号

〒101-0021
東京都千代田区外神田2-17-2
延寿お茶の水ビル 4階
TEL 03-3251-4081
FAX 03-3251-4082
URL http://www.toho.or.jp

第十七回中村元東方学術賞授賞式

当財団の創立者である中村元博士が顕著な功績のある研究者を顕彰することを目的として設立した中村元東方学術賞の第十七回（平成十九年度）の受賞者が、選考委員会による選考の結果、竹村牧男博士（東洋大学教授）に決定し、その授賞式が中村元博士の命日である十月十日（火）東京都千代田区のインド大使館において行われました。

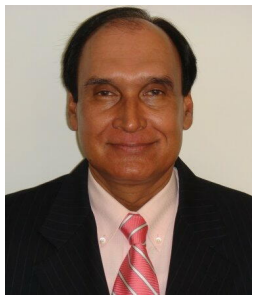
竹村博士は唯識思想研究、『大乗起信論』及び華厳思想研究、禅思想及び日本仏教研究、浄土教の研究、西田幾多郎・鈴木大拙の宗教哲学研究等、仏教研究の多岐な領域にわたり、単なる文献学ではなく宗教哲学的関心により斬新な視点をしばしば提供していること、ならびに学問の社会的還元に熱心に取り組んでいることが授賞の理由となりました。

授賞式には、駐日インド大使H・K・シン閣下にご臨席頂いたほか、多くの関係各位にご参列頂きました。式では前田専學選考委員会委員長からの審査報告に続いて、当財団及び駐日インド大使館より、それぞれ賞状と記念品とが竹村博士に授与されました。また、大使閣下と川崎信定博士よりお祝いのお言葉を、竹村博士からは謝辞を頂戴いたしました。

式の終了後、大使館近くの弘済会館内に会場を移して、引き続き多くの来賓を迎え、竹村博士を囲んで盛大な祝賀会が催されました。

【写真】祝賀会場の竹村博士と令夫人

駐日インド大使　H・K・シン閣下のお言葉（英語原文は次頁に掲載）



駐日インド大使　H.K.シン閣下

前田專學東方研究会理事長、奈良康明東方研究会常務理事、今回の受賞者であらせられます竹村牧男東洋大学教授、川崎信定筑波大学名誉教授、そして、ご来賓の皆様。ようこそ、第十七回中村元東方学術賞にこちらの大使館にお集まりくださいました。

過去十数年間にわたり、インド大使館でこの式を開催させて頂き、非常に光栄に思っております。そして、この臨時の大使館の手狭な建物でも、何とかこの式を開催できることをうれしく思っております。日印の人々、文化、国同士の理解に貢献された中村教授に深く尊敬の意を表します。

本年度の受賞者であられる竹村牧男東洋大学教授に、喜んで心からお祝いの意を申し上げます。この受賞は、教授の傑出した仏教研究に対するものです。

ご来賓の皆様、東方研究会の皆様。日本とインドの友好関係は、六世紀の仏教伝来から始まり、一四〇〇年という長い道のりを歩んでまいりました。慈悲と友好という釈迦のメッセージは、私たちの揺るぎない絆であります。私たちの文明は、双方の絶え間ないさまざまな歴史的交流によって、豊かになってきました。奈良や京都の多くの寺院を訪れた私の経験からも、そのことを申し上げることができます。それらの寺院では、はるか古代から続く日本とインド間の絆が、今も生き生きと保たれており、日印をつなぐ伝統が今も保持されていることに、私は深い感銘を受けました。

私たちが共有するこの精神的伝統を基盤として、新しい精神を分かち合い、現代の日印関係を発展させていきたいと願っております。私たちが共有する寛容、調和、慈悲の価値観をもってすれば、日印両国が、世界の平和を進め、文化の調和を育み、世界の人々の兄弟愛のためにできることは大変多いことでしょう。

私は東方研究会の活動と事業に、賞賛の辞を捧げたいと思います。そうした活動が、私たちの精神的伝統を保ち、広めていく助けになるのです。今後とも、研究会のご発展を願っております。前田專學博士の卓越した指導による熱心なご活動に、感謝の意を表したいと思います。

ここで皆様にお伝えしたいことがございます。およそ一年前にインドの首相が始めた計画がございます。皆様ご存じのように、およそ一五〇〇年から一〇〇〇年前に、インドにおける学問の優れた中心地、ナーランダー大学がございました。五〇〇年以上もの間、ナーランダー大学はアジア文明の根源であり、中心でした。ナーランダー大学の影響は、インドのみならず東南アジアのほとんど、さらには東アジアにまで及びました。

今のスマトラである「スヴァルナブーミ」ほどの遠いところから、王や王子や優れた人々が、ナーランダー大学に留学したことを、歴史は物語っています。古代におけるナーランダー大学は、仏教思想を東南アジアやインドネシアに広めていきました。仏教思想の影響は今日ムスリムになっているそれら多くの地域に残っており、そのことは慈悲・平和・調和といった仏陀のメッセージを広めるために、ナーランダー大学の果たした大きな役割を示しております。

前回の東アジアサミット（EAS）で、インドの首相は、そうした文明的な見地からナーランダー大学復興の所信を述べました。EASは、その所信をすぐに受け入れました。EASは、インド、シンガポール、日本、中国の高レベルの代表と、それを支える専門家から構成されております。

計画のための最初の会合は、二ヶ月前にシンガポールで行われました。次の会合は、今年の十二月（＊二〇〇七年）に東京で行われます。その計画に携わっているグループは、アマルティア・セン博士が率いておられます。来年早々にも、具体的なカリキュラムや独立した国際ナーランダー大学の組織を明らかにできるように動いております。

このお知らせが、貴東方研究会の今後の仕事や活動に貢献出来ればと思っております。

改めて、竹村教授に本年度の受賞を心よりお祝い申し上げます。本日ご出席の皆様、ご出席頂きありがとうございました。

どうも、ありがとうございました。

上：前田專學選考委員長による審査結果報告

下：大使閣下より竹村博士への副賞の授与

第十一号　目次

第十七回中村元東方学術賞授賞式 …… 1頁
第十七回中村元東方学術賞授賞式（続き） …… 2頁
平成十九年下半期行事報告／「閑話本題」 …… 3頁
東方学院講師紹介／東方学院のご案内 …… 4頁
研究会員の声（関西地区教室） …… 5頁
研究会員の声（東京本校） …… 6頁
研究活動報告／研究員紹介 …… 7頁
財団法人東方研究会からのお知らせ …… 8頁

謝辞

東洋大学　竹村牧男

財団法人東方研究会並びにインド大使館におかれましては、私のような浅学の者に対して、中村元東方学術賞という大変大きな栄誉をお与え下さり、感謝に耐えません。心より御礼申し上げます。私自身は自分で、仏教学の主流には位置していないと思っております。私の学業のもっとも根底にあるものは己事究明ということであり、その思いに沿って、自分の思うままに勝手気ままに勉強してきましたので、学界の評価からは無縁だと思っていました。今回の思いがけない受賞に恥じないよう、今後もますます精進したいものと思います。

思えば、今日まがりなりにも大学で教員の仕事をしていられるのは、諸先生・諸先輩および多くの同僚・後輩のさまざまなご支援・ご理解によるもので、感謝の念で一杯です。私の本当に拙い学業をこのような形で評価して下さり、さらに精進するよう激励して下さった、諸先生・諸先輩に、重ねて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

【写真】授賞式会場における竹村博士

駐日インド大使　H・K・シン閣下のお言葉　（原文）

Dr. Sengaku Maeda, President of the Eastern Institute, Dr. Yasuaki Nara, Executive Director of the Eastern Institute, Dr. Makio Takemura, Professor of Toyo University and the award winner of this evening, Dr. Nobusada Kawasaki, Prof. Emeritus of the University of Tsukuba, distinguished guests, Ladies and Gentlemen.

Good evening to all of you, and a very warm welcome to this Embassy for the 17th award presentation of the Nakamura Hajime Eastern Study Prize.

We are greatly honoured that we have continually been hosting this annual ceremony at the Indian Embassy. I am happy that even in this temporary Embassy building, we are able to continue this practice. We have profound respect for Prof. Nakamura's contribution to better understanding between our two peoples, cultures and nations.

It is my pleasure to offer my warmest congratulations to this year's awarded Dr. Makio Takemura, Professor of Toyo University. The award to Dr. Takemura is in recognition of his outstanding contribution to the study of Buddhism.

Distinguished members of the Eastern Institute and dear friends.

The age old friendship between Japan and India began with the arrival of Buddhism in the 6th century A.D. and is now some, 14 hundreds years old. The Buddha's message of compassion and universal brotherhood has been a bond between our two countries and peoples and the regular exchange of ideas and experiences has enriched our civilizations. I can testify to this with my personal experiences in visiting a large numbers of institutions and temples in Nara and Kyoto. I have been moved by the fact that the ancient bounds which go so far back in history are wonderfully preserved today and the traditions which bind us together is still observed in this institutions.

We must continue to build further on the foundations of our shared spiritual heritage and impart a new spirit to our relationship in contemporary times. With the values which both our societies share, harmony and compassion, there is much that India and Japan can contribute not only to each other's societies but also to peace, tolerance and compassion and in world at large.

I would like to particularly commend the activities and the work of the Eastern Institute for its invaluable contribution to spreading and maintaining out shared spiritual heritage. I wish the Eastern Institute continued success in its endeavours. I also wish to put on record our appreciation for the dedicated work being done by the Institute under the valuable guidance of Dr. Maeda.

I would like to share with you some important information regarding a new initiative which was launched by my Prime Minister about a year ago.

You must all have heard that about fifteen hundred years ago, upto around a thousand years ago, there was a pre-eminent centre of learning in India, the Nalanda University. The role of the university over the five hundred or more years it existed was central to the roots of Asian civilization at large. And the outreach of the university covered not just India but most of the Southeast Asia and East Asia.

History records that kings and princes and senior figures from as far away as Suvarnabhumi, which is called now Sumatra, travelled to Nalanda to be educated. The seamless and peaceful assimilation of Buddhist ideas from Nalanda into Southeast Asia and Indochina, and the existence of these links even today even though some of these territories are majority Muslim, signifies the absolutely outstanding role played by Nalanda in spreading the Buddha's message of compassion, peace and harmony to the wider region.

So my Prime Minister proposed at the last East Asia Summit that the Nalanda University be rebuild as a civilizational project. The idea was immediately accepted by EAS leaders. A high level group comprising representatives from India, Singapore, Japan and China and supported by additional experts, has been constituted.

The first meeting of the Nalanda Mentor Group took place in Singapore two months ago. The next meeting will be taken place in Tokyo in December this year. We are hoping that the Group, headed by Dr. Prof. Amartya Sen, we bring forward its ideas about curriculum and the structure of this independent international university very soon. Sometime in the next year, initial steps towards revival of Nalanda will be finalized.

I hope this information will give further impetus to the work and the efforts of this splendid institution of yours, the Eastern Institute.

I would once again like to offer my warmest congratulations to Dr. Takemura for winning this year's award. I would like to thank all of you for your presence here with us this afternoon.

Thank you very much

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　財団法人東方研究会

平成十九年下半期（七月～十二月）行事報告

第十七回鎌倉夏期宗教講座

八月二十六日（日）、第十七回となる鎌倉夏期宗教講座が鶴岡八幡宮のご協力とNHK学園のご後援により鶴岡八幡宮直会殿にて開講されました。当日は多数の受講者にお越し頂く中、初めに前田專學東方学院長より挨拶が行われ、続いて大東文化大学教授である松本照敬先生による「インド思想の源泉」と題するご講演と、国際仏教学大学院大学教授・同大学長・東京大学名誉教授である木村清孝先生による「仏教と神道の間」と題するご講演が行われました。講演の後には両講師と前田專學東方学院長および当財団の奈良康明常務理事を囲んでの質疑応答の時間が設けられ、参加者との間に活発な議論が交わされました。

なお、木村先生のご講演の内容は三月刊行予定の『東方』第二十三号に掲載いたしますので是非ご覧下さい。

上：会場全景／下：質疑応答

ナマステ・インディア二〇〇七

九月二十九日（土）・三十日（日）、東京の代々木公園内で開催された「第十五回 ナマステ・インディア二〇〇七」にブースを出しました。このイベントは「日印交流年」における中心的行事の一つであり、インドと関係のある多数の方々が参加しています。当財団のブースでは機関誌『東方』や研究会員の方が「仏像彫刻の実技」講座で製作された作品などを展示すると共に東方学院およびホームページ等に関する各種印刷物の配布を中心とする広報活動を行いました。両日共、悪天候の中を多数ご来場頂き有難うございました。

会場風景（右が当会ブース）

ホームページアドレス
URL http://www.indofestival.com

酬佛恩講合同講演会

十一月二十五日（日）午後、奈良市西ノ京の法相宗大本山薬師寺において、同寺のご後援の下、東方学院と酬仏恩講共催で第八回目となる合同講演会を開催いたしました。

講演会は前田学院長の挨拶に始まり、インドへの留学経験を踏まえた、堀田和義氏（東方研究会アジア諸国派遣留学生・東京大学大学院）による「現代のジャイナ教教団について－仏教の『姉妹宗教』－」と題する講演と原始仏教の専門家である橋本哲夫先生による「おシャカさまの悩み」と題するご講演とが行われ、最後は薬師寺の松久保秀胤長老より閉会の辞を賜り閉会いたしました。

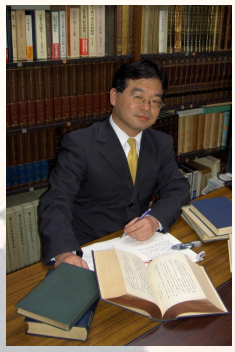
橋本先生のご講演の様子

研究員のコラム　第１回

閑話本題

天竺に行った日本人僧

森 和也（東方研究会研究員）



真如法親王（高岳親王）の名は、渋澤龍彦の小説『高丘親王航海記』の影響だろうか、それなりに知られている。真如法親王は天竺に渡ろうとして、途中の羅越国で歿した。真如法親王のほか、天竺に渡ろうとした日本人には、奝然・慶祚・明恵・栄西などがいるが、これらはすべて計画で終わった。

インドの地を踏んだ日本人で年代と名前が明らかなのは、皮肉なことに仏教徒ではなく、宣教師フランシスコ・ザビエルが日本へ行くきっかけとなったヤジロウ（アンジロウ）である。ヤジロウら三人の日本人が、一五四八年、ポルトガルの植民地ゴアで洗礼をうけている。

ヤジロウ以前に、天竺に行った日本人、それも仏教徒はいなかったのであろうか。唐の文人段成式が奇談を集めた『酉陽雑俎』という本がある。その中に、「倭国僧金剛三昧」から成式が直接聞いた天竺の話がある。この金剛三昧こそが日本人の僧侶として最初に天竺に行った人物である。

彼が言うには、かつて中天竺に行ったことがある。寺院には、玄奘三蔵の麻のくつ、匙や箸を多く描いていて、綵雲に乗っている。恐らく西域には無いものだからであろう。いつも斎日には両手を挙げ地に伏して礼拝している、と。また、那蘭陀寺の僧の食堂には、暑い時期には、大きな蠅が数万もいる。僧が堂に入る時になると、ことごとく自然に飛んで庭の樹に集まる、とも。

金剛三昧が語る天竺の話はこれだけである。九世紀の前半の入竺と推定されるが、それ以上の詳しい年代は明らかにできない。そのうえ、天竺に行った日本人僧の存在は日本側の記録には一切残されていない。恐らくは、この日本人僧は、『酉陽雑俎』に「金剛三昧」という名を留めて、異国の土と化し、井真成のように、故国日本では忘れ去られてしまったのだろう。

江戸時代の松下見林や、明治以降では南方熊楠、高楠順次郎など、関心をむける者もわずかにはいたが、現在、日本仏教史で言及されることはほとんどなく、日本人として初めて天竺の地を踏んだであろう金剛三昧の名は歴史の霧の中に隠れたままである。

東方学院　講師紹介

思い出

山口 惠照
（大阪大学名誉教授）

東方学院関西地区教室は、昭和五九年（一九八四年）春、開設されました。それ以来、足かけ二十二年、幸い大過なく授業を続けることができました。

東方学院の創立者・初代学院長、故中村元博士の恩顧を蒙って開設された初年度は、故藤田清、故村主恵快、苅谷定彦、西岡祖秀、西尾秀生の諸先生と、老生山口が、講師兼世話係となり、円頓寺（大阪市北区太融寺町、佐藤英夫住職）を教室として借用し、スタートしました。広く一般の市民に開放された東方学院が、学を究め道を求める有志の方がたに認められたので、開設後、四、五年経った頃、研究リポートを綴って印刷する計画がまとまり、『東方雑華』第一集の刊行となりました。以来、第二集、第三集と逐次刊行、本年、第十九集を刊行しました。

『東方雑華』の刊行・継続は、教室に在籍した学院生（研究会員）が、教室から離れＯＢとなってからも、各自の研究成果をまとめて寄稿した結果であり、論説、エッセー、紀行、詩歌、童話など、多彩な文集となりました。

講師は、『東方学院の手引き』に記される「一般思想研究」「個別研究」「言語と文化」の諸部門に関して、自由に各自のテーマを掲げて授業するという状況で、初年度以来、定年制を持たない結果、老生の毎週出勤も続いています。

講義風景（茨木別院）

教室は「関西地区教室」の場合、いろいろな事情から、借用先を変更すること四度、最初に借用した円頓寺から、法華クラブ（北区兎我野町）、梅新イーストホテル（北区西天満）と移転、昨年度から茨木別院（茨木市別院町）を借用しています。

円頓寺様はじめ借用先の皆様からは、現在にいたるまで、数多の御配慮・御親切を戴き、心温まる思い出が湧いています。

（右下へ続く）

（上段より続く）

ここに留意したいのは、教室を借用している茨木別院の境内に、茨木市の象徴ともいうべき記念樹が存在することです。記念樹は茨木市が「記念章」をもって登録している黒松と、黒松の隣りに育つ桜の大樹です。黒松は樹齢推定三〇〇年、緑陰深厚の風情を堪え、桜の大樹も黒松と並んですばらしい枝ぶりで、一両年、春宵一刻、「寺小屋」の伝統を偲ばせてもらいました。

足かけ二十二年、ふり返って見ると、東方学院各位をはじめ、多くの方がたの御世話になり、貴重な御指教を戴きました。忘れ難いのは、サンスクリットが象徴する口伝の教えの伝統です。この伝統には、全人類の解放に資する不変の真実が最初期から確立され、輝いていて、老生の帰趣ともなっています。

二〇〇八（平成二十）年度　東方学院のご案内

来たる四月より東方学院の新年度が始まります。二〇〇八年度からは左記の各講座が新たに開講されます。各種講座の詳細やお申込方法などは『手引き』またはホームページにてご確認下さい。なお、二〇〇八年度より、受講料の払込手数料を払込者負担に変更させて頂きます。それに伴い、払込用紙が従来の赤色のものから青色の用紙に変更となりますので、お申込の際はご注意願います。また、事務手続の都合上なるべく機械でのご処理をお願い申し上げます。

《東京》
- 正法眼蔵を読む　【月曜・初級】　田上 太秀 講師
- 中国語入門　【水曜・初級】　林 鳴宇 講師
- インド哲学の探求　【金曜・初級】　宮元 啓一 講師

《関西》
- サンスクリット語基礎講読　【土曜・中級】　茨田 通俊 講師

《中部》
- 観音菩薩の説話と信仰　【土曜・初級】　佐久間 留理子 講師

『東方学院の手引き』無料配布中

東方学院では、各種講座の内容・受講料・お申し込み方法などを記載した『二〇〇八　東方学院の手引き』を配布いたしております（無料）。事務局にお越し頂ければ直接お渡しいたします。

郵送をご希望の場合は、「手引き希望」と表記した封筒に二百円分の切手（郵送料・実費）と入手を希望される方の郵便番号・住所・氏名・電話番号を記した紙を同封の上、東方学院事務局宛にお送り下さい。『手引き』一部をお送りいたします。

なお、複数部をお求めの方は別途お問い合わせをお願いいたします。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　財団法人東方研究会

研究会員の声

（関西地区教室）

東方学院でサンスクリット語を学ぶ

井上 久仁子

東方学院の関西教室に通いだしたのは、一九九四年からだった様に思います。サンスクリット語の初級クラスでした。比較的理系の生活を続けて来た私にとって、このクラスに通う事は相当なカルチャーショックを受ける世界への進出でした。

しかし、私にとって東方学院は一言で言うと『居心地がいい』所になりました。先生方をはじめ一緒に学ぶ人たちも前向きで、たくさんの刺激を受け自分が助けられ成長できると感じられる場所です。

元々、自分では気持ちは仏教徒のつもりでいたけど、特に何かを学んだ事もなく知るためには何から取りかかればいいのかもわからない状態でした。その頃の私は親類の法事等に参加しては、「宗派によってお経も違うし、する事も違うし・・・」「なんで？なんで？」『どうすればいいの？』状態だったのです。

そして

何事にも「凝る」タチの私は短絡的に『お釈迦さんは何を言わはったの？』と、一から勉強したくなり仏教学科へ。そこで、サンスクリット語も学んだ方がと東方学院へ。

こう書くと今はずいぶんものを知っているようですが、とんと進歩していないのが現状です。子育て・仕事・時間のやりくり・・・と障害物が山ほどあり頓挫。ここ何年かは東方学院から離れていましたが、昨年退職したのを機会に再挑戦中です。もちろん「サンスクリット語入門」からです。以前は習得できなかったサンスクリット語ですが、今はじっくり時間をかけ「落ちこぼれる事なく」をモットーに頑張っています。一年目はクリアできました。今年は少し未知の分野に入ります。しっかりついて行き、今後は仏教についても学んで行きたいと考えています。

福井 淑恵

東方学院の関西教室に入ったのは、社団法人ヨーガ研究所から資格をいただいた頃から、ウパニシャッドや仏教についてもう少し詳しく知りたいと思うようになったのがきっかけでした。

私は、山口惠照先生の講義を主に受けていますが、山口先生の講義はサンスクリットを基礎から学びたかった私の希望に適うものでした。テキストには、『インド思想史』『アジア仏教史』などもありますが、なんといっても、毎回配ってくださるプリントが素晴らしいもので、それに沿った講義を聴講しています。

教室は、東方学院が創立された頃からの熱心な研究会員の方も何人もいらっしゃるほどで、伝統あるところです。いつも親切に、愚問にも答えてくださる先生や学友に囲まれて、安心して聴講できます。住職の方、定年された方、主婦、若い女性も多く参加しています。二年前に梅新イーストホテルから真宗大谷派茨木別院に場所がかわりましたが、東方学院を支えてくださる関西の人達の御縁の深さを感じます。以前、同じ東方学院の講師である佐藤宏宗先生から、「僕も昔、聴講していました。」と伺ったことがあり、この教室の深さに恐れ入りました。

また、年度の最後には『東方雑華』という、関西教室の文集が発行されており、一年間聴講し、考え、気づいたことを載せていただけます。私も、一年目には『カタ・ウパニシャッド』の一節から運命について書いてみました。二年目は自分の問題を解いていく中から「五臓説」を考え、三年目は私がしていることの意味（意義）について自分なりにまとめました。これらは、いつも暖かい目で見守って、私が熟慮し、気づけるように指導してくださっている山口惠照先生のおかげです。まだまだ充分には理解できていませんが、先生のもとでサーンキヤ哲学をじかにゆっくりと聞いていけることは、大きな成果をもたらしているものと思います。

創立者である故中村元博士によって掲げられた理念を大切に保持し続けている東方学院の素晴らしさを、三年間通わせていただく中で、しっかりと実感しています。子育てにおわれていた主婦に聴聞の機会を与えてくださった東方学院の皆様に感謝しています。

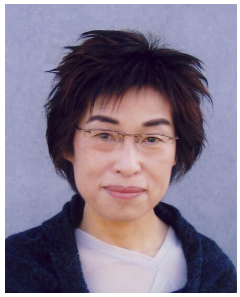
研究会員の皆様からの寄稿をお待ち申し上げております

詳細は当財団事務局「東方だより」編集部までお問い合わせ下さい。なお、紙面の都合上、一部の文言を改めて頂くか、掲載をお断りする場合がございますので、予めご了承願います。

研究会員の声

（東京本校）

長谷川 恵子



あこがれの中村先生の面接があるというので、緊張してよく眠れなかったことが、昨日のように思い出されます。それから早くも十四年の歳月が過ぎてゆきました。

初めは仏教美術への興味から、学生の頃に次第に仏教への興味がわいてきて、仕事をもつ主婦であった頃も、機会があったらいつか東方学院に行ってみたいと思っておりました。中村先生の講義では、『大智度論』他いくつかの文献を学ばせていただきましたが、大手町の大教室に、新幹線で、長野・名古屋などからいらしているという方々がいらっしゃったのを、印象深く思い出します。また、インドや欧米からの先生方のお話を、中村先生の通訳で聞いたことは、大変楽しかった思い出です。

東方学院では、他にもいくつかの講座を受講させていただきましたが、とりわけ津田真一先生という、人生の中での最高の師にめぐり会えたことは本当に幸せでした。

先生の講義は、大変刺激的なものです。十数年にわたって、常にその時新たに学問として得られたことをお話下さっています。大学までの学生生活では、まるで経験したことのない、魅力的な、本当に驚くべきものでした。

原始仏教から大乗仏教、現代の日本仏教までと、タントラ、キリスト教、広汎な西洋哲学までもが常に包括されていて、あくことなく新しい展開を続けられています。

私には今でも難しすぎるものではありますが、それを得られたことで、生きていく上での多くの示唆をいただけたことを、うれしく思っております。そのうえ、自分の好きな趣味の分野においても、新しい切り口で見ることができるようになったように思えます。

そしてまた、先生のお人柄を中心に集まる気心の知れた長年の受講生の方々とお目にかかれる木曜日は、私の一番の楽しみです。

様々なキャリアをお持ちの、向学心に燃えたこれらの方々もまた、私の先生でもあられます。

この津田先生の素晴らしい学問を、ひとりでも多くの方々と共に学べたらと思う次第です。

元山 雅也

私は二〇世紀の後半、日本が世界の経済をリードしていた頃三十数年間、仕事の関係で地球の東西南北をかけめぐり多くの国・地域の人々と親しく接する機会に恵まれてまいりました。そのような中で実感したことは、日本人は国際社会の中で決して心底から尊敬されている民族とは言えないのではないかということでありました。

何故か。理由はいろいろ考えられますが欧米人に比し日本人の宗教意識の希薄さということもその一因ではないかと気付いたのであります。

そこからキリスト教とは何か、仏教とは何か、同じアジアに生まれたキリスト教は何故西進し、仏教は何故東漸したのか等々比較思想といいますか比較文明面の疑問が雲霞の如く湧き出て来たのであります。

そのような時に学歴・年齢・職業・国籍・性別などに一切捉われず、東洋思想の研究とその成果の普及を目的とし真に学を究め道を求めたい人々のために開かれた本学院の存在を知りその設立趣意に共鳴、爾来既に八年になりますが研究会員として受講させて頂いている次第です。

現在、田村晃祐先生の「聖徳太子」及び「日本仏教史（親鸞研究）」の講座を楽しく拝聴しております。煩悩・執着心に捉われ貪瞋癡の泥沼にまみれあえぎ乍ら日々を送っている身として先生のお話に心が洗われるような気がします。

人間である限り煩悩・執着心を完全に捨てることは出来ません。しかし実存とは人間存在の究極的な在り方とはどのようなものかを考え、その究極的な在り方を果てしなく追求して行こうと努力すること自体に価値があるのではないかと思っています。

思想というものはそこで生を営んでいる人々の精神風土と親和して伝播して行くものではないかと思います。荒野・放浪・牧畜を肯定する旧約聖書の教えが小麦文明を営む西欧の人々の心になじみ西進し、一方、一木一草全て生あるものとし一切衆生全ての生物を大切にし、殺すな、という深い倫理、人間と自然との共生を説く釈迦の思想が、人間同志の間のみの倫理的責任に重きを置き、自然を対立的存在と見做す西方の世界観になじまず専ら東方のモンスーン地域の稲作文明を営む人々の心に浸透して行ったのは至極当然と思えるのであります。

人間も自然の一部であることを説き、自然との共生、循環をその思想の根底に置く仏教こそ人類にとって普遍的な思想たり得るのではないかと思っています。

無断転載・複製を禁ず

編集・発行　財団法人東方研究会

研究活動報告 ― 研究部会紹介 ―

当財団では、平成十九年度より、更なる研究活動の進展と研究員相互の交流を目的として新たに研究部会を設置致しました。全ての研究員がいずれかの部会に所属し、それぞれの分野で研究に努めています。
以下、各研究部会の主任からの、担当研究部会の概要および活動状況の紹介を掲載いたします。

〈アジア文化・宗教・歴史研究部会〉主任：水上文義

名称の如く極めて広い領域を扱う。それゆえ当面は、各研究員が専門とする分野の研究成果を発表し、コメンテーターのコメント(解説と評価)と分野を異にする研究員との質疑や助言・批判を通じて、学際的多角的な視点を自己の研鑽に活かすことを目的とする。また将来的にはアジア宗教文化に関する協同総合研究を目指す。

〈写本研究部会〉主任：田中公明

仏教研究の基礎となる仏典の写本研究を目的としている。本年一月五日には、ドイツ留学から一時帰国中の幅田裕美研究員を迎え、「大般涅槃経の原典研究－写本研究と思想研究－」と題する研究会を行った。部会は現在、諸般の事情により定期的な会合が困難な状況にあるが、今後は何とか軌道に乗せたいと考えている。

〈ダルシャナ研究部会〉主任：有賀弘紀

インドにおける哲学的トピックスを通時的・共時的に取り上げ、思想研究の視点を豊かにし、方法論的可能性を探っていくことを目標としている。所属研究員の研究分野はサーンキヤ・ヨーガ、ニヤーヤ、ヴェーダーンタを中心とした広範な領域に及ぶ。そのため、各自の研究状況や現在の問題意識を踏まえ、本年度は言葉に対するインド哲学のアプローチを研究していくこととした。本年度は『ニヤーヤ・スートラ』の言語に関する部分を検討している。

〈東洋思想研究部会〉主任：茨田通俊

仏教の生死観を中心に，生命倫理の問題について議論を進めている。中村先生の著作を読み進めることを基軸にして，専門分野の異なる者が意見を出し合い，お互いの視野を広げることが期待される。

〈比較思想研究部会〉主任：保坂俊司（麗澤大学教授）

中村先生の『普遍思想』を担当者が朗読・解説し、その後出席者全員で議論するという形式で、毎月第三水曜日に研究会を続けている。中村先生の『普遍思想』をたたき台に、夫々の立場から自由な議論をし、先生の比較思想の方法論を学び習得する事を目指している。時には中村先生の論点への疑問なども出されるなど、活発な議論が交わされている。

〈仏教学研究部会（南・東南アジア）〉主任：釈悟震

月一回のペースで愛知県名古屋市にて、各研究員の専門を活かして輪番制で研究発表を行っている。現在第四回が終了した。具体的には第一回、研究総会、第二回、佐久間留理子「『仏教タントリズムにおける他宗教観』を考えるための研究方法の検討」、第三回、服部育郎「寛容と包括について－P.ハッカーの研究を参考に－」、第四回、田邊和子「タイ国バンコクのワット・ポーにおける仏教の受戒式など」が発表された。これからは杉岡信行、釈悟震が引き続き発表を行う予定である。研究発表後は、研究員それぞれの立場から忌憚のない意見を交わし、研究の進展を促すと同時に情報交換や親睦を重ね、sectionalism を超えた学問を目指しておられた中村元博士の御遺志に少しでも近づくべく力を合わせているところである。

研究員紹介

石川 巌

私と東方研究会との関わりの始まりからお話しましょう。私が中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻に入学して、古代チベット史に関する研究を本格的に始め出そうとしたころ、そこにチベット語の先生がおりませんでしたので、東方学院に入学しました。そのころ東方学院で初級チベット語の教鞭を執っておられたのは、チベット学の世界的権威である山口瑞鳳先生でした。チベットに関係する学問に携わる方々がご存知の通り、先生のチベット語文法は目を見張るほど新しい考えに満ちており、また詳細を極めているので、それを理解するのは大変なのですが、実際に直接お話を聴けたことで、抵抗少なくその文法を受け入れることができました。また先生は古代チベット史に関する研究が多く、その雑談を聴くだけで、自分の研究に役立ちました。

このように東方学院での山口瑞鳳先生の講義は研究者としての自分の基礎を形作る大きな要因でありました。先生との関わりは学院を出たあとも続き、大学院を退学したあとは、先生のご推薦により東方研究会に研究員として迎えて頂くに至ったのでした。そして現在に至るまで古代チベット史の研究に従事しているという次第です。

最近チベットは旅行もしやすくなってきましたが、それでもチベットと言いますと、不思議が一杯の秘境というイメージがあると思います。そうしますと、私の専門はそのチベットの古代史ですから、不思議や驚きに満ち溢れた世界を研究していると見られるかもしれません。実際現代日本人から見れば、仰天するようなことに溢れてますが、それはそういう側面もあるということでして、我々が親近感を抱くような側面もあるのです。少なくとも古代チベットは外部と隔絶された秘境ではありません。多くの外来文化が流入し、それらがチベタナイズされ、チベット文化の一部として融和していったのです。例えば、チベット文化の核となっておりますチベット仏教は、インド系仏教にその由緒を持ち、それが土着宗教を初めとした他の諸宗教から影響を被ったり、あるいはそれらとの違いを強く意識して独自的に発展したりして成ったものだということを挙げるだけでも、その文化の豊かな国際性は明らかでしょう。研究員としまして私は、ユーラシア大陸における文化交流の中で形成されていった古代チベット世界を明るみに出すよう、今後とも微力を尽していこうと考えております。

財団法人東方研究会からのお知らせ

会員募集のお知らせ

当財団では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会員と、当財団への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がございます。

◇普通会員◇

普通会員の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当財団主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

年会費　七千円

◇賛助会員◇

◇維持会員◇

当財団では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当財団の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。

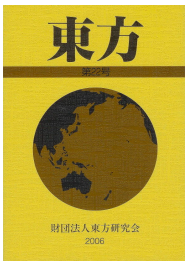
賛助会費　一口　一万円
維持会員　一口　五万円

＊詳細は財団法人東方研究会事務局までお問い合わせください。

『東方』第二十三号　刊行

三月三十一日、当財団の機関誌『東方』の最新号が刊行されます。今号には論考六篇のほか、鎌倉夏期宗教講座講演録を掲載いたしております。前号まで連載しておりました中村元博士東方学院講義録は、都合により今号は休載させて頂きます。

なお、本誌は会員（研究会員を除く）の皆様にお送りしているほか、各種研究機関・図書館等にも納められています。頒布可能なバックナンバーもございますので、詳細は事務局までお問い合わせください。



第二十二号　表紙写真

【執筆者】

・前田　專學（東方学院長）
・木村　清孝（国際仏教学大学院大学学長）
・定方　晟（東海大学名誉教授）
・茨田　通俊（東方研究会研究員）
・常磐井　慈裕（東方研究会研究員）
・龍口　恭子（東方学院講師）
・入井　善樹（光教寺住職）
・森　和也（東方研究会研究員）

（敬称略）

新春研究発表会　三月開催

毎年恒例の当会主催の新春会が、今年からは名称を改め「新春研究発表会」として開催されることとなりました。各種会員の皆様のお越しをお待ち申し上げております。

【開催概要】

日時　平成二十年三月十一日（火）　午後四時開場
会場　東京ガーデンパレス
　　東京都文京区湯島一―七―五
　　電話　〇三―三八一三―六二一一

一、講演の部（午後四時半～六時）於「錦」（二階）
　講師　清水　晶子氏　（東方研究会研究員）
　「デリーのジャイナ教徒のコミュニティー」
　講師　木村　清孝氏　（国際仏教学大学院大学学長・日本印度学仏教学会理事長）
　「これからの東アジア仏教研究に望む」

二、懇親会の部（午後六時～）於「雅」（二階）
　会費　八千円

＊本会は各種会員の方のみご参加頂けます。

「東方だより」編集部より

編集部では読者の皆様からのご意見・ご要望などをお待ち申し上げております。また、本号より連載を開始いたしました「研究員のコラム　閑話本題」（三頁下段）で取り上げて欲しい題材も併せて募集いたしております。編集部一同、より良い紙面作りのため皆様のご協力をお願い申し上げます。なお、ご連絡は手紙（宛名面に「東方だより編集部宛」とご記入願います）にて承ります。

交通のご案内（東京本部）

鉄道各線の最寄駅（徒歩十分以内）

JR東日本
　中央線／総武線　御茶ノ水駅［聖橋口］
つくばエクスプレス
　秋葉原駅［A3出口］
東京メトロ
　銀座線　末広町駅［3番出口］
　千代田線　新御茶ノ水駅［B2出口］
　丸の内線　御茶ノ水駅［郵便局口］

当財団本部及び東方学院東京本校のあるビルは神田明神通りと神田神社の正面参道に面しております（大鳥居東隣）。

外　観
（延寿御茶ノ水ビル 4階）

＊駐車場・駐輪場のご用意はございません。

編集後記

「東方だより」新装第九号より編集作業の一端を担って参りましたが、この第十一号を以て担当を離れることとなりました。読者の皆様をはじめ、寄稿して頂いた諸先生方や研究会員の皆様そして研究員諸氏に心より篤く御礼申し上げます。今後もホームページと共に広報活動の両輪としてますます充実した内容でお届けできるものと確信致しております。読者の皆様ならびに関係各位におかれましては今後とも引き続きご支援のほどお願い申し上げます。

財団法人東方研究会事務局「東方だより」編集部　渡邊　信之

東方だより　第十一号（平成二十年二月一日）
編集／発行　財団法人東方研究会